

はじめに

授業記録を読みとる三つの視点

本校校長・松浦善満

この紀要には本校の教師がとりくんだ授業実践の振り返りが納められています。

みなさまは、授業の振り返り（省察・reflection）をどのようにしておられるのでしょうか。ビデオで授業を再現して振り返ることもできますが、授業記録をまとめながら振り返ることもできます。ここでは、授業記録で振り返る際の視点について私なりに思うところを述べてみます。

第一は、授業者がその授業で何をテーマにして学習を組み立てているのか、「学習課題」に着目します。その授業に子どもがジャンプできるような「学習課題」が設定できているかどうかです。それは、その先生が授業を構成される時の問題意識や「授業のアイデア」といってもよいでしょう。

参観している私たちが、「この授業には先生のアイデアが生かされているな。」と思われる授業は、子どもにとっても挑戦しがいのある授業になるものです。

第二は、設定された「学習課題」に対して、実際に子どもはどのように学んだのか、授業の最後に子どもたちはどのように変化したのか、「子どもの変化」に注目して授業を振り返ります。そのためには、子どもの発言や活動の事実である逐語記録（プロトコール）を読み解くことです。

第三は、授業の経過です。簡単に言えば、45分の授業の流れを見ると教師の教育的タクト（Takt・「接触」）が見えるのです。

授業者が「今は授業の山場か、終末か」、「そこでは子どもの対話は深まっているか、教師の受け止め方は適切か」など、時間経過と状況の意識をもちつつ授業を展開することが重要です。いわゆる「行為中の省察」（D.ショーン）という課題です。

この点に関しては、三十年前、広島大学の吉本均（故人）先生が授業記録をとられているところを拝見したことがあります。同氏は、長方形のダンボール製のバインダーにB4（いまだとA4が適当だと思うが）の紙を横に用いていました。その左端に縦の棒軸を記され、0から5分ごとにメモリののように区切りを10個つけられ、その時間の区切りに、教師の主要な活動と発問を記入していました。そして紙面の真ん中から右端に四角い枠を書かれ、その授業の板書を記入していました。側でみながら、私はこれ一枚でその授業が一目瞭然に分かりました。

授業記録の技法も多様ですが、授業記録の読み取りも人により異なるでしょう。しかしながら、何らかの視点があると新たな知見が生まれ、楽しく読むことができます。

この冊子には本校の教師が各自の授業論を展開しています。みなさまが独自の視点で冊子を読んでいただき、ご批評、ご教示いただけることを心よりお願い申し上げます。

2009年3月1日